

観光客・釣り人に気持ちよくゴミ処理施設を建てさせるプロジェクト

／リバーススクール—子供から大人に環境教育を—

WG4 岸上祐子・森井悠太・寺本航・岩淵翼

【Summary】ビキン川流域には原生林が広大に広がり、そこには伝統的に生物資源を利用し続けてきた原住民族“ウデヘ族”が小さな村を作って生活している。近年、この素朴な村にも近代化の波が押し寄せ、紙やプラスチックなどのゴミの増加に伴った、ゴミの問題が顕在化しつつある。それにもかかわらず、具体的な解決策は提案されておらず、自然環境の破壊や、地下水の汚染などによる村人の健康への悪影響が懸念されている。ゴミ問題の根本的な解決には、無理のない継続可能な方法が求められる。ビキン川流域において、将来も持続的に資源となりうるのは広大な自然環境とウデヘ族の伝統工芸・芸能であり、ゴミ問題の解決にもそれを利用することが望ましい。幸い、その自然を求めて、年間多くの観光客・釣り客が村を訪れる。この点に着目し、訪問者と協力してゴミ問題を解決するシステムを提案した。また、村の子供の教育を行うことよって、村の将来を担う人材を育成する必要があるとも考えた。これは単に子供の教育にと留まらず、家庭を介して、子供から大人へ意識・行動が伝達するということを想定したアイデアである。「リバーススクール」と名付けたこのアイデアと、訪問者に協力を求めるというアイデアの2つが、我々の提案する企画の中核にある。この企画を基に、1~2年以内の実現を目標とした短期的な計画と、3~5年以内の実現を目標とした中長期的な計画を提案した。短期的には訪問客へゴミの持ち帰りや寄付金を促すための観光ガイドの養成や体制の実施、インターネットを介した国外の子どもたちとのコミュニケーションによる環境意識の醸成の実現を目指す。中長期的には観光ガイドの定着、ゴミ処理施設への建設費プール体制強化、子どもたちの影響を受けての大人の意識変化を実現することを目標とした。



【実習を終えての感想】持続可能な社会を目指す上で、ゴミ処理の問題は非常に重要なテーマである。それはビキン川流域の世界的にも貴重な森林とそれを利用する人々の間にも当てはまると予想した。現地で道端に積み重なるゴミの山を目の当たりにし、その予想が正しかったことを実感した。予想していなかったのは、その量である。想像以上に深刻な現実に唖然とした。ゴミを減らすためにはまず、そこに住む人々の意識を変える必要があると我々は考えた。現地では、そのことを特に意識し、投棄されたゴミが及ぼす悪影響を、住民に熱く語った。さらに、極東連邦大学の大学生ともこの問題を議論し、考え方や意識の違いに驚かされながらも、若い世代の人々とも問題を共有した。このような経験は、この先大きな財産になるだろう。この実習を通して、問題の解決策を共に模索し、共有するということが、どれほど難しいことなのかを学ぶことができた。ここで学んだことは、今後世界中で応用可能なものであり、非常に有意義な実習であったと思う。